

KOZOOM サロンから肖像彫刻を！

清水健二

毎年6月から7月にかけて、八尾美術展が開催されています。昨年はコロナの影響で中止になりましたが、今年は色々対策を打って開催にこぎつけたいと計画しています。その公募展で私は、美術協会の立体造形部門でお世話させていただいている関係上、彫刻の基本になる肖像の作品例を展示することになっています。

そこで、肖像の彫刻制作について独断と偏見になるかもしれませんが、少々蘊蓄を傾け、ご披露してみようと思います。

モデルを直接前にしないで制作はできない、と言う偉い先生方がおられますが、私は決してそうでは無いと思っています。

モデルに対峙しても、モデルの表情は常に変わり、今日の顔は明日は変わります。その時の感情の変化はなかなか掴み難いものです。

写真を撮ってその人の顔を作ろうと思っても、とてもできません。写真通りの顔は作れても、表情の無いものになるからです。つまりデスマスクと同様で、その瞬間の記録にとどまってしまいます。

モデルに直接会って、色々とりとめない会話をしながら、その人の表情の変化を読み取り、その人の持っている雰囲気を感じ取らないと、美しい女性でも人形の顔になってしまうからです。

例えば仏像を撮影する写真家は、照明を当てながら、最も美しい表情を探し出し、感動を受けた角度を捉えて表現しようと努力しています。彫刻家も同じでモデルの持っている雰囲気や人となりを探し出し、創り出していかねばなりません。

会話しながら表情を記憶して、創作することになります。

モデルの人の骨格は変わりませんから、そこはしっかり特徴を掴み、若干誇張し表現しますが、そのさじ加減が作品の勝負どころになります。

彫刻展で全然知らない人の肖像でも、風変わりな骨格の造形は目を引き、「うまい、迫力がある」と受け止めてもらえるのです。また、知らない人の肖像からでも、生き生きとした表情や苦悩の表情に接すると、感情が伝わってきて、「すごい！」と思うわけです。

遠隔地にある人の肖像彫刻制作は不可能でした。しかしコロナ禍によるリモートの映像普及によって、私に大きな着想を与えてくれたのが、Kozoom サロンでした。

Kozoom サロンで何度も顔を会わせるうち、その人の会話や行動から彫像の対象になることを発見し、挑戦してみようと思い立ちました。

リモートで会い、ビデオで繰り返してみても、どこまで特徴を掴み取れるかがポイントになりますが、どこまで生き生きと表現していけるか、これから制作しながら答えを出していくこととなります。ああでもない、こうでもない苦戦しますが、そのプロセスが彫刻家の楽しみといえましょう。

気に入った作品ができると、リモートワークで制作したものだとして、自信にもなり新しい世界が開けそうに思っています。

リモートワーク作品だと言うと、「そんなバカな！」と笑われるかもしれませんが、コロナ時代のこの挑戦を判ってもらえれば、とても嬉しいなと思いながら準備を進めたいと思っている今日この頃です。